

---

# 松山シンスケー南国の魔法番外編一

ありま氷炎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

松山シンスケ―南国の魔法番外編―

### 【Nコード】

N8795P

### 【作者名】

ありま氷炎

### 【あらすじ】

「南国の魔法」の影のヒロイン、上杉カナエの彼氏の松山シンスケの苦悩を書いています。

本編を読まなくても大丈夫だと思いますが、読んでいたほうが彼のつらさがよくわかります。

シンスケがカナエにあったときから物語は始まります。

全5話です。\*ブログで完結後、なろうへ掲載してます。

## 松山シンスケ1（前書き）

現在ありま氷炎が連載中の「南国の魔法」の影のヒロイン、上杉カナエの彼氏の松山シンスケの苦悩を書いています。

本編を読まなくても大丈夫だと思いますが、読んでいたほうが彼のつらさがよくわかります。

## 松山シンスケ1

近所に引っ越してきた子は無口な子だった。

空手をしてるらしく、空手着をきて家を出る姿を何度が見た。

近所なのに話したことがなかった。

中学生になり、同じクラスになった。

その子はいつも一人だった。いじめられてる様子もなかった。クラスの女子とも普通に話してる様子だったけど

なぜかいつも一人だった。

かたくな雰囲気彼女を包んでいた。

凜とした空気が彼女の周りと包んでいた。

俺はいつの間にか彼女から目が離せなくなっていた。

「上杉さん」

「何？」

俺がそう呼ぶと彼女は読んでいた本から顔を上げた。きれいな顔だった。目が澄んでいた。吸い込まれそうになった。

「あ、俺。近所に住んでるんだ。松山シンスケっていうんだ。」

「うん。知ってる。何度か見たことがあった。」

俺は彼女が俺のことを知っていたことがうれしかった。

「その本、好きなの？」

「うん。お気に入りの作家。読んでてせつなくなるんだ」

彼女は笑顔でそう答えた。

俺たちはその日から友達になった。

高校生になり、俺と彼女は違うクラスになり、以前よりも話すことがなくなった。それでも近所なので本の貸し借りなどをしていたが、彼女は部活に忙しくらしく、俺と顔を合わせることが少なくなっていた。

「上杉、待ってよ」

学校一といっても言いぐらいのモテ男の武田タカオが彼女に声をかけた。彼女は無視して歩いていった。

「上杉、今日は（空手）部長の送別会だから。参加しないとだめだよ」

武田が先に歩く彼女の腕を強引に掴むと体育館へ連れていくのが見えた。彼女の顔が少し赤くなっているような気がした。

「松山、久しぶり。どうした？」

俺は2年になったある日、学校で彼女に本を返す口実を作り話しかけた。

「これ、ずっと借りていただろう？」

「ああ、忘れてた。ありがとう」

彼女は微笑んでそう答えた。

背中に刺すよう視線を感じた。それは誰かが俺を見る視線だった。振り返ると後ろにいたのは武田だった。しかし武田は友人達と談笑していた。

気のせいかな？

2年になって彼女の雰囲気は変わった気がした。やわらかくなったような気がした。

つまらない歴史の授業でぼんやりと窓の外をみると彼女の姿が見え

た。すんなりと伸びた手足が体操着から見え、眩しかった。その長い髪の毛を束ね、額に汗をかいていた。

ふと俺は彼女を見つめる、もうひとつの視線に気がついた。

武田が彼女を見つめていた。武田は俺が見ていることに気がつくとも微笑んだ。その笑顔は恐ろしく美しく、冷たかった。

3年になり、彼女はまた変わった。

大人の色香というものの、彼女を見てると切なくなった。

「上杉！」

帰り道、彼女を見た。俺がそう呼ぶと彼女は不機嫌そうに振り向いた。

「松山、ごめん。上杉って呼ぶなって言ってるだろう」

武田にはそう呼ばせてるだろう？と言いたくなかったが、あの美しい冷たい顔を思い出し言うのをやめた。

「わかったよ、上杉さん。今日山田ジロウの本人荷したんだけど借りにくる？」

「本当？読みたいな。あ、でも今日はだめだ。明日行ってもいい？」

「OK・明日な」

しかし数週間たっても彼女が借りにくることはなかった。

それから1ヶ月がたち、彼女は空手部をやめた。そして彼女は学校も休みがちになった。

しかし受験が近いある日、俺は彼女を学校で見かけた。

「上杉！」

俺がそう呼ぶと彼女は不機嫌そうに振り向いた。

「上杉って呼ぶなって言ってるだろ」

「だったら、カナエって呼んでいい？」

俺の言葉に彼女はため息をついた。

「いいよ。上杉よりはましだ」

カナエって呼べるのか。

俺はうれしくなって笑った。

「じゃあ、カナエ。お前、市山大学受けるんだろっ？」

「そうだけど？」

何で知ってるんだと彼女は不機嫌そうに俺を見た。

俺は彼女のクラスメートの女子と友達だった。その子もたまたま市山大志望だったことから情報を得た。俺は受ける大学を決めかねていたから、彼女と同じ大学に決めた。

「俺もその大学受けるんだ。お前空手部に入ってからなんかずっと急がしそうだっただろっ。今はやめたみたいだから。一緒に勉強しようぜ」

彼女は俺を一瞥すると、一人で歩き出した。

「待てよ。どうせ、帰り道は一緒だろっ」

俺は彼女を慌てて追いかけた。

背中に刺すような視線を感じたがどうでもよかった。

彼女はもう空手部でもないし、武田ではなく俺と同じ大学に行くのだから。

## 松山シンスケ2

「付き合ってくれないか」

あの日の夕方俺は決意をして彼女にそう聞いた。

彼女はオレンジ色に染まった空を見上げた。そして俺を見つめた。

「いいよ…」

「本当か！」

俺は嬉しくなって彼女を抱きしめた。彼女の体がこわばったのがわかった。

彼女の美しい黒髪を撫でる。

ベッドで横になっていいる彼女は時たま、眉をひそめる。

彼女が夜なかなか眠れない性質だということに気づいたのはベッドを共にするようになってからだった。

俺は彼女を安心させようとその体を抱きしめた。彼女の腕が俺の腕を掴む。それは痛いくらいだった。

「武田…」

彼女の口から漏れたその名前に俺は息がとまるかと思った。寝言らしく、彼女は俺を掴む腕の力を弱めると体を丸めるようにした。寝顔はとても苦しそうだった。

「なあ、松山。昨日の夜、私にか変なこと言わなかった？」

彼女はスプーンでミルクに浮かぶコーンフレークをすくいながらそう言った。俺はいつものお気に入りの日本食の朝食メニューの納豆に卵をいれた。

「いや。別に。」

俺は精一杯笑顔を作ってそう言った。



お互いに実家通いなので周一はこうやってホテルに泊まっていて、その朝食と一緒に食べるのが習慣になっていた。

「松山？納豆混ぜすぎじゃないか？」

そう彼女に言われて見ると卵が泡だって、手元の小碗の中の納豆が泡だらけになっていた。

「これがうまいんだよ」

俺はそう言いながら納豆をご飯にかける。

「そう言えば今日は辞令が出る日か。」

「うん、東京に行くことになるけど。平気か？」

彼女は俺を気遣うように見た。付き合うようになって彼女はそういう表情を見せるようになった。俺はその顔を見るのがたまらなく好きだった。

「大丈夫。俺の会社は東京出張多いから。遊びにいくよ。」

俺は笑顔でそう答えた。

会社に彼女を迎えにいった。今日は車でこっちに来てたから、そのまま彼女を乗せて家に帰るつもりだった。

俺は視線を感じた。刺すような視線だった。

彼女は俺を見ていて、気づいてないようだった。

俺は視線の主を探るため、顔を上げた。

武田…。

武田タカオがこちらを見ていた。武田は俺たちの姿を確認すると再び建物の置くに入っていた。

なんで武田が??

「どうしたんだ？松山」

「なんでもない」

彼女は動揺する俺を心配げに見上げた。

「武田をみたけど？」

迷ったが俺はその夜、彼女に直接聞いた。彼女は一瞬動きを止めた後、視線を俺からはずした。

「うちの会社吸収合併されただろう。親会社が武田が勤めてる会社だったんだ。私も初めて見たときは驚いた」  
彼女は淡々とそう答えた。

「松山？」

俺は急に不安になり、彼女を抱きしめた。

時間がたつに連れて俺の不安は大きくなり、彼女の様子もおかしくなった。沈んでることが多くなった。でも彼女の行動は変わらず、彼女が会社外で武田と会ってる様子はなかった。

あの視線、刺すような視線。

10年たっても変わっていなかった。

### 松山シンスケ3

東京に、武田の会社に彼女が働くようになって数ヶ月がたった。俺は武田に婚約者がいることを知りほっとした。

しかしあの射抜くような視線が気になっていた。

10年前とひとつも変わらない視線。

そして、考え事をするが多くなってしまった彼女。

俺は不安になった。彼女を束縛したかった。

結婚：俺はそのことを考えることが多くなった。

でも俺は彼女の答えを知っていた。

仕事が好きで彼女、あいつを忘れられない彼女。

俺の子供を生んで家庭に入ってくれるとは思わなかった。

でも俺は言わずにはいられなかった。

髪の色をあいつと同じ色にかえ、彼女はますます苦しそうな顔を浮かべるようになった。

ある日、ベッドで眠る俺の髪を愛しげに撫でていた。髪の主が俺だとわかると一瞬びつくりしたような顔になった。彼女はベッドにもぐりこみ、顔を隠したが、俺にはわかっていた。

でも諦め切れなかった。

彼女が好きだった。

いつから彼女が俺にとって特別な存在になったのかわからない。  
でも俺は離したくなかった。  
この腕にずっと抱きしめていたかった。

「カナエ…」

ぎゅっと俺は彼女の体を抱きしめた。一瞬体がびくつと震えたが彼女は抵抗しなかった。

俺はその首筋にキスをした。そして彼女の柔らかな胸に掴んだ。彼女は甘い声をあげた。俺は止められなかった。

彼女が好きだった。

離れられなかった。

彼女を解放してやることができなかった。

## 松山シンスケ4

「シン！」

細身の体の美女は俺を見ると妖艶な笑みを浮かべた。

「ジユデイ。久々だな」

俺は笑顔を向けるとその向かいの席に腰を下ろした。

「昨日、カナエに会ったわ！」

ジユデイは嬉しそうに笑いながらそう言った。彼女の紹介で俺は7年前にジユデイ・チュアにあった。初めのうちは発音がすこしおかしい日本語を使っていたが卒業するころには完璧な発音で日本語を話せるようになっていた。

「東京に行ったのか？」

「ええ、だって私の目的はカナエだもの」

ジユデイはそう言うてまた笑った。ジユデイはよく笑うようになった。大学のころは彼女と同じでぶつちようずらをしてることが多かったのに。

「シンは本当変わらないわね。カナエもだったけど。相変わらず人形みたいだったわ」

俺は黙ってジユデイの話を聞いていた。

「ねえ。シン、カナエもらってもいい？」

ジユデイの言葉に俺は口の中のお茶を吐きだしそうになった。それを見てジユデイは笑った。

「あなた、まだカナエのことを好きなんですよ？」

ジユデイは俺に紙ナプキンを渡しながらそう聞いた。

「もちろんだ。しかも俺達は付き合ってる。」

「嘘でしょ?!」

ジユデイは俺の言葉に目を丸くした。

「本当だ。2年近くになる。」

「そう。じゃあ、きつとカナエはウンって言わないかしら」

ジユディはテーブルの上に置かれたチョコレートケーキに視線を落としながらつぶやいた。

「なんのことだ？」

「聞いてないの？」

ジユディはまずいことを言ったというようなばつの悪そうな顔になった。

ここ数日俺は彼女と連絡をとってなかった。

「頼む。教えてくれ」

「多分。カナエはシンに心配させたくないから、言わなかったと思うんだけど」

ジユディは言いずらそうに口を開いた。

ジユディと別れた後、俺は茫然とした。

香港行きの話があったなんて聞いたことがなかった。

昨日話したばかりと言ってたから、聞いてなくて当然かもしれないが

俺はショックだった。

「カナエ」

アパートの下で待つてる俺の姿をみて彼女は驚いていた。

「電話すればよかったのに」

彼女をそう言つて、俺を部屋に入れた。

「カナエ！」

俺は自分の気持ちを抑えきれなかった。

玄関口で俺は彼女を抱きしめた。

「松山？！」

彼女は体をこわばらせていた。

「行かないでくれ。お願いだ」

俺は自分が泣いているような気がした。彼女はゆっくり、しかし強

く俺を拒否した。

「ごめん。松山。私は決めたんだ。香港で自分の可能性を試す。日本のことをすべて忘れて」

彼女の瞳には強い意思が宿っていた。

「俺のせいかな？」

なぜか俺はそう口にした。

俺は知っていた。

俺の気持ちたちが彼女に負担をかけていたのを。

「違う。誰のせいでもない。ごめん。松山。お願いだ。行かせてくれ。」

彼女は俺の腕を強く掴んで、俺を見上げた。その瞳は涙で潤んでいた。

嘘だ

彼女はあいつから、あいつへの気持ちから逃げるために日本を出たんだ。

そして俺からも逃げるために

俺は強引に彼女を抱きよせ、その唇を奪った。彼女が珍しく抵抗したが、俺の方が力は上だった。

俺はそのまま彼女を押し倒した。

最低だ。

俺は自分が最低なことをしてることを知っていた。

でも彼女を逃したくなかった。

## 松山シンスケ5

行為が終わった後の彼女は無言でシャワールームに歩いて行った。

俺を責めようとせず、無言だった。

こころなしかその背中が泣いているようだった。

俺は自分が情けなかった。

彼女を苦しめたくないのに、苦しめてる自分が嫌だった。

「松山」

ベッドに腰掛けてうつむいている俺に彼女は声をかけた。シャワー上がりの石鹸のさわやかな香りがした。

「ごめん」

彼女は俺にそう言った。彼女の目は真っ赤に腫れていた。

ごめんというべきなのは俺だ。

俺は彼女を見ていた。自分がどういふ表情をしているのかわからなかった。

捨てられた子犬のような顔をしてるのだろうか

「松山 本当にごめん。今ままでずっと側にいてくれたのに」

彼女はぼろぼろと涙を流して続けた。

初めて見た涙だった。

俺のために泣いている？



「私はここでは生きていけない。新しい土地でやり直したいんだ」  
俺は黙って彼女の言葉を聞いていた。

彼女は憔悴しきっていた。

いつの間にこんなに痩せたんだろう。

東京にきてから彼女はこんなに華奢になってしまった。

「俺ならお前をずっと守ってやれるのに」  
俺の言葉に彼女は何も答えなかった。

わかっていた。

彼女は逃げたいんだ。  
すべてのことから。

俺から、あいつから

俺は彼女を抱きしめた。  
涙が出てきた。

「カナエ わかった。わかったよ。今までごめん。好きだった。ずっと好きだった。」

俺は馬鹿みたいにそう繰り返した。

胸がえぐられるようだった。

でも、俺は彼女を本当に好きだった。

彼女をこれ以上苦しめたくなかった。

## 松山シンスケ5（後書き）

この後、上杉カナエは社員旅行に行きます。  
そして「南国の魔法」へと続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8795p/>

---

松山シンスケ 南国の魔法番外編一

2011年7月12日12時10分発行